

機関番号：32636

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2008～2010

課題番号：20520132

研究課題名(和文) 中国北朝墓誌工房の基礎的研究

研究課題名(英文) Fundamental Study on Manufacturing Atelier of Epitaph in North
Dynasties of China

研究代表者

澤田 雅弘 (SAWADA MASAHIRO)

大東文化大学・文学部・教授

研究者番号：20162547

研究成果の概要(和文)：

北朝では墓誌を刻する場合、複数の刻工が作業を分担することが多い。また、同日に葬られた親族の墓誌間には、書者が同じ人か同派であるものがある。それらの墓誌は、刻工技術の違いを観察するのに適している。一件の墓誌の中に混在する各種の鐫刻技術を分析し、墓誌を刻する工房を考察した結果、工房には異なる鐫刻技術を継承した刻工たちが同時に所属し、その各グループが均等に仕事ができるような慣習があった可能性の高いことがわかった。

研究成果の概要(英文)：

Many of epitaphs in the north dynasties are division of labors of two or more character engraver. In addition, there is the one whose calligrapher is a person of the same group when the burial day is the same if it points it out. Those epitaphs are suitable for observing the difference of the engraving technique. Then, I analyzed the technique of various engravings that had mixed in those epitaphs. As a result, it turned out that various character engravers who had succeeded a different engraving technique had belonged to one atelier. Moreover, I thought inductively based on the case, and they judged that the possibility with the rule on the custom of evenly sharing work was high.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	900,000	270,000	1,170,000
2009年度	400,000	120,000	520,000
2010年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	1,800,000	540,000	2,340,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：芸術学 — 芸術学・芸術史・芸術一般

キーワード：書道史 石刻 墓誌 工房 刻法 北朝

1. 研究開始当初の背景

北朝墓誌は既存件数が多い上、今日も多数出土しているが、工匠である刻者名は明記しないのが通例で、史書をはじめとする諸文献にも当然記録されることがない。したがって、

従来、刻者及び鐫刻の実態については解明方法さえ見出しえず、墓誌工房研究、あるいは墓誌に関わる刻者の実態の研究も皆無であった。

また、石刻の字蹟が揮毫された字蹟の真を

どこまで伝えているかという問題は、書法史の根幹に関わるきわめて重大な問題で、石刻を評価する際に刻調に留意してはきたものの、刻法を主対象とする研究は皆無で、[墓誌の字蹟＝揮毫された筆跡に忠実な刻である]との観念がなお支配し、憶測による誤解も多いのが実情である。

報告者は、旧稿（1999、2000）において、1件の墓誌の鐫刻に刻者が複数たずさわる実態が普遍的であることや、筆法と刻法及び筆者と刻者の関係を明らかにした。その新知見によって、「今後、墓誌書風を論ずる場合には、1件の誌石中における刻者の人数や書者との組織関連など、多角的な観点からの検討が必要」になったと、刻者・刻法・鐫刻組織の重要性が認知されるようになった。報告者はさらに、それらをもとに新たな着眼点を加えた上述の科学研究費補助金（萌芽研究「中国北朝墓誌中の同一刻法の分布に関する研究」）において、刻者及び刻法研究の障壁を打開し、鐫刻工房研究の糸口を見出した。

報告者は上述の科学研究費補助金（萌芽研究）で、墓誌鐫刻工房の実態をうかがわせる興味深い現象を検出した。それを一般化していえば、次のような現象である。同日に葬られた親族XとYの両墓誌に、それぞれAB兩種の刻法が混在する。そしてA刻法にはa b二人の刻者が、B刻法にもc d二人の刻者が関与している。ところが不思議なことに、A刻法保持者aとB刻法保持者cとが組んで墓誌Xを刻し、A刻法保持者bとB刻法保持者dとが組んで墓誌Yを刻している。このことは当時の墓誌工房が同一刻法の保持者のみを成員とする閉鎖的組織ではないことを伝えているが、この現象がどの程度普遍性をもつものか、まったく不明で、その答えを探るべく、本研究を計画するにいたった。

2. 研究の目的

本研究は、上述の平成18-19年度科学研究費補助金（萌芽研究）で開拓した方法論を応用し、〈同日に隣接墓地に葬られた親族墓誌群〉に着目して新たに検出した北朝墓誌を核に、各墓誌に混在する刻法を逐一分析することで、墓誌を鐫刻する際の人員構成を明らかにし、これら事例を蓄積し、書丹（朱を使って石面に直書き）された筆蹟を鐫刻する北朝墓誌工房の規模や組織形態について帰納的に論及し、墓誌工房の研究の方途を開拓しようとするものである。

また、従来の書法史では、酷似する書法の石刻を同一筆者と比定し、同派の別手との観点を有してこなかった。報告者は、これまでの一連の研究から、同派の別手による酷似書法の存在を認識するにいたった。筆者も問題は、墓誌製造過程で重要な要素であるため、本研究ではこの種の書法上の問題にも必要

に応じて論及し、書法分析に「同派の別手」の視座を提示する。

3. 研究の方法

平成18-19年度科学研究費補助金（萌芽研究）で北朝墓誌を対象に開拓した方法一すなわち、対象の墓誌の全字蹟を文字単位に裁断しカードに編成し、さらに分類整理したうえで、刻法を検討し、混在する刻法の状況を明らかにする一を応用し、対象を東魏・北齊・北周・隋の墓誌に拡大し、かつ北朝墓誌中の同日に隣接する墓地に葬られた親族墓誌群を主たる対象として、各墓誌に混在する刻法を分析し、その結果を蓄積したうえで帰納的に考察し、上述の目的を達成しようとするものである。

対象を、同日に隣接する墓地に葬られた親族墓誌群に絞るのは、複数の墓誌のそれぞれについて刻法を分析する際、書法が異なる複数の墓誌では、書風の相違が刻法によるものか書法によるものかを見極めが困難であるが、同日に隣接する墓地に葬られた親族墓誌群の一部には、書風が同じ事例を認めることができ、この問題を克服することができる。しかも、この種の複数の親族墓誌の製造はほぼ同時期で、しかもその工房も同じか近隣であった可能性が高いと考えられるため、「1研究開始当初の背景」で述べた、複数の墓誌間に発見した興味深い現象に関する事例を蓄積する本研究の目的に照らし、もっとも適格な対象と考えたからである。

4. 研究成果

（1）三年の研究期間、北朝墓誌に見られる同日葬の親族墓誌間の刻法分布を分析してきた結果、族縁・埋葬日・埋葬地・書法からみて、書者が同手もしくは同派で、製造工房が同じか近隣の工房と考えられる墓誌間には、それぞれ複数の刻法が混在することが一般的であることが判明したが、その各種刻法中には、同手または同派の刻法と考えられる刻法が両誌に跨ってあらわれることが少なくない。本研究期間に蓄積した事例から、この現象を帰納的に考えた結果、刻者間には鐫刻機会を均等にする分業方式を取ろうとする、ある種の慣習があった可能性が高いといわざるをえない。また、鐫刻の工房形態については、蓄積した刻法の混在状態からみて、複数の刻法を伝授することができるような大規模な機関に刻工が多数所属する形態か、工房が必要に応じて刻工を雇用する形態の両者のいずれかに帰着するが、後者の場合は、特定の刻法を体得する者を成員とする複数の小集団から刻工を雇用する形態か、または、異なる刻法の体得者を成員とする大集団内から人選して雇用する形態であったと考えざるをえない。

なお、公表した各成果のうち上述の成果の内容に直接する論文の概要は、以下のとおりである。

「北魏墓誌の刻と工房—李媛華墓誌と元子直墓誌について—」では、ほど近い土地に同日に葬られた李媛華(元勰の妃)と元子直(元勰の子。ただし李媛華の実子ではない)の各墓誌について、その書法と刻法を分析した。まず書は、書風や字体が酷似するほかに、布字(字の布置)における癖まで一致することから、両誌の書者は同手とみられる。刻についていえば、李媛華墓誌は6名ないし7名の刻者が分担するが、その奏刀技術はやや未熟なひとりを除いておおむね一定水準に達している。その内の1名Aは元子直墓誌の鑿刻分担者と同一刻法である。一方、元子直墓誌の鑿刻は、奏刀技能が極めて未熟なものを含むおそらく9名の分担であるが、その内には同一刻法を奏する別手2名Bとbがあり、bは未熟である。そして、両墓誌の間の同一刻法の奏刀者AとBは、同手である可能性が高い。なお、本稿の末には、三年にわたる研究の結果、考える工房の形態について論及した。

「東魏墓誌の刻について—李挺墓誌・劉幼妃墓誌・元季聡墓誌—」では、李挺と合葬された妻の劉幼妃と元季聡の各誌について、書法と刻法を分析した以下の結果を報告した。筆者については、李・劉両誌は同手であるが、元誌は李・劉両誌と同じ書派に属する似寄りの別手であり、今日実態が明らかでない書流の実例として貴重である。刻法については、李誌にはA・B・C・D・E五種が、劉誌にはF・G・H三種が混在するが、元誌はI一種が独占する。なお、Aの分担域には同一刻法を奏する未熟なaが含まれ、Cにも同一刻法を奏する未熟なgが含まれる。そして、李誌のA a・劉誌のG gの四者は同一刻法で、内AとGは同手である。また李誌のBと劉誌のH、元誌のIは同一刻法で、おそらく三者は同手である。李誌のDとEとは類似する刻法であるが、同一刻法と判断する明確な根拠は見出せない。また、D・E両者とCとは同一刻法となし難いが、類似の要素もあり、さらにこの三者はFと別の刻法でありながら、類似要素もある。これらが遠祖を同じくする別刻法であるか、そもそも別源の刻法であるのかについては判断を下しがたい。この三誌についても、同一刻法が複数の墓誌間に認められる現象が指摘できるが、三誌中もっとも小さな元誌の鑿刻を同一刻法が独占した理由についても、推論を付記した。

「隋代墓誌の刻について—張盈墓誌と夫人蕭氏墓誌—について」では、同日に合葬された張盈と夫人蕭飭性の各墓誌について、書法と刻法を分析した以下の結果を報告した。両誌の筆者は同手である。また刻については、

張盈墓誌にはA・Bの両刻法が、夫人蕭氏墓誌にはC・Dの両刻法が混在し、AとCとは同一刻法、BとDとも同一刻法であるが、AとC、BとDがそれぞれ同手であるか否かについては、即断しがたい。また、興味深いことに、刻法A・Cは南朝の新興書法に手慣れた刻者の刻法、B・Dは北朝碑誌の書法に手慣れた刻者の刻法とみられる。したがって、両誌の鑿刻は、南朝出身者と北朝出身者の両者、あるいは南北朝以来の南北各刻者集団が分担した可能性が高い。

(2) なお、研究過程で、時空を越えて伝播する特定の刻法を発見した。今後はこの種の特定の刻法の検出に努め、北朝墓誌工房の研究に資する計画である。公表した各成果のうちこの内容に直接する論文1件の概要は、つぎのとおりである。

「北魏楊鈞墓誌の書法と刻法—特徴ある刻法[001]を中心に—」では、新出土の楊鈞墓誌の書法が、北魏の元彦妻蘭将墓誌・元顯墓誌・元瑒墓誌・元延明墓誌・元鑽遠墓誌等と一類であること、及び楊鈞墓誌に混在する刻法の一つが、元顯墓誌・元瑒墓誌にそれぞれ混在する刻法の一つと同一刻法であるばかりか、東魏の李斑墓誌・劉幼妃墓誌にそれぞれ混在する刻法の一つとも同一刻法であることを分析し明らかにしたものである。

[001]と命名したその刻法は、北魏建義元年(528)から東魏興和3年(541)にわたる時間と、陝西省華陰・河南省洛陽・河南省安陽の三地点を結ぶ地域とを跨いで普及していた特定刻派の刻法といえ、しかもこの刻法の成員は、同一書流の別手が揮毫した墓誌のみならず、別の書流の一員が揮毫した墓誌にも、たずさわっている。すなわち、刻法[001]は、北朝において同一刻法による鑿刻が時代・地域・書派・氏族を越えて行われていたことを示す興味深い事例である。この[001]の発見は、墓誌工房・鑿刻史研究の開拓に対し、報告者が行ってきた研究方法—同日に葬られた親族間の墓誌で、しかも書法が酷似する墓誌を対象とする方法—と異なる、新たな道筋を示すものである。また、同一刻法が書法の相違を相殺あるいは克復して、すっかり同趣の字跡に変えている点で、[001]は、筆跡に従属しない自律的刻法であり、そのことは、鑿刻が先導してあらたな筆法を胎動させ、あるいは昇華させた可能性をも示唆する、書法史上のきわめて重大な問題を提示する事例でもある。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計5件)

① 澤田雅弘、北魏墓誌の刻と工房—李媛

華墓誌と元子直墓誌について一、書学書道史論叢2011(書学書道史学会編, 萱原書房刊)、査読無、人選有、2011、315-339頁

②澤田雅弘、北魏楊鈞墓誌の書法と刻法一特徴ある刻法[001]を中心に一、大東書道研究(大東文化大学書道研究所)、18号、査読有、2011、36-54頁

③澤田雅弘、東魏墓誌の刻について一李挺墓誌・劉幼妃墓誌・元季聡墓誌一、大東書道研究(大東文化大学書道研究所)、17号、査読有、2010、34-51頁

④澤田雅弘、隋代墓誌の刻について一張盈墓誌と夫人蕭氏墓誌一、大東書道研究(大東文化大学書道研究所)、16号、査読有、2009、34-45頁

⑤澤田雅弘、偽刻墓誌考一(北魏)張君夫人李淑真墓誌・(陳)到仲举墓誌一、書学文化(淑徳大学書学文化センター)、10号、査読無、2009、29-40頁

[図書] (計1件)

①井垣清明、石田肇、伊藤文生、澤田雅弘、鈴木晴彦、高城弘一、土屋昌明、柏書房、書の総合事典、2010、679頁

[その他] (計1件)

○展示公開

展覧会名称：中国墓誌拓本展一科研費購入品の公開一

会場：大東文化大学板橋校舎ギャラリー

期間：2011年1月24日-26日

ホームページ等 無し

6. 研究組織

(1) 研究代表者

澤田 雅弘(SAWADA MASAHIRO)

大東文化大学・文学部・教授

研究者番号：20162547

(2) 研究分担者 無し
()

研究者番号：

(3) 連携研究者 無し
()

研究者番号：